

「マーク・トウェインの描く黒人像：『ハックルベリー・フィンの冒険』における自然人ジムについて」

1885 年に米国で出版されたマーク・トウェイン著『ハックルベリー・フィンの冒険』は、ヘミングウェイや T.S. エリオットなどから賞賛されている。しかし 1950 年代頃からアフリカ系アメリカ人や奴隷廃止論者、教育関係者の間で波紋を広げ始め非難的になり、現在では多くの学校で教科書としての使用が禁止されている。その主要な理由として、多くの黒人差別語の使用と作品中の黒人描写が挙げられる。この批判に対して作品中の人種差別の言葉のみをあげつらって、**Racist** と糾弾するのは一方的であるという考えがある。また作品をその当時の歴史のコンテクストの中で捉えるべきだと指摘する批評家もいる。また、マーク・トウェインを最初から **Racist** と決めつけるといった、作品以前の問題を追及する人も少なからずいるが、彼の幼年時代のアンクル・ダンルや後のフレデリック・ダグラスなどのアフリカ系アメリカ人との友好関係から、彼の黒人観は即断で **Racist** とは言えない側面もある。さらに作品中のハックがジムに一目置いていることを指摘している批評家もいる。

本稿では、トウェインの黒人観を検討し、『ハックルベリー・フィンの冒険』における黒人像は本当にゆがめられたものとなっているか、特にジムの描写に着目しジムを人種差別の観点からではなく、聡明な一人の「自然人」として探求することを試みた。

第 1 章では、『ハックルベリー・フィンの冒険』に関する代表的な批評と「自然人としてのハック」や「自然人としてのジム」についての先行研究を紹介する。また、黒人ジムの物語の中心的な役割についても述べている。論旨はジムを奴隷としてだけではなく、自然人としての観点から探ることを目的としている。つまりミシシッピの自然と一体化して生活しようとするジムの試み、自由への渴望、すでに身につけている自然の中で生き延びるための知識、家族愛そしてハックとの友情等に着目しジムの自然人としての可能性を探る。ここで自然人の定義を説明する。19 世紀アメリカのフロンティアの舞台で冒険を繰り広げるジムたちと、束縛されない環境で生きる自然人の姿とは類似していることを示す。

第2章では、トウェインの幼年時代をたどり、彼と黒人との友好関係について説明し、彼の黒人観の概観について述べる。作品中に「nigger」という人種差別に当たる単語が、215回以上も使われていることを巡っての論争にも着目する。差別語に対する多くの批判はあるが、トウェインはジムを肯定的に描いていることを指摘する。

第3章では、黒人奴隷の歴史を簡潔に叙述する。奴隷制の定義や、奴隷の置かれた当時の境遇や状況、奴隷制禁止条項について述べる。また、ジムがミズーリ州の黒人奴隷ということから、彼の置かれた状況をニューオーリンズの奴隷の境遇と比べている。

第4章では、トウェインがリアリストとして知られていることに触れる。また『ハックルベリー・フィンの冒険』の中の“ロマンス的”要素と“リアリズム的”要素について述べる。ここで言うロマンス的要素とは英雄的、冒険的という意味である。『ハックルベリー・フィンの冒険』でトム・ソーヤーは、空想世界に浸るロマンティストでありハック・フィンが現実的で冷めた考えを持つリアリストである。またハックのリアリズムの要素は彼のグレンジャーフォード家の緻密な描写から、またジムの逃亡奴隷としての心境からも見て取れる。しかし自然の中で生き抜くジムの描写は情報の詳細さとしての **realism** の域を超え、ハックとジムがミシシッピ川を舞台に自然を謳歌したり詩的に自然を描写する様子は「個人の自由、自然への帰化」などに重きを置く19世紀の「ロマン主義」の要素に近いことを論述する。

第5章では、ロマン主義と自然人について述べている。第一章に続き、「自然人」のイメージを別の定義で示しジムの自然人としての温厚な性格に触れる。ロマン主義の定義（個人の生命力・感覚・感情・自我解放、神秘的要素などに重点を置く）もこの章でくわしく見ていく。また、ジムの信仰していた可能性のある“Black Magic”「ブードゥー教」についても説明する。さらに、ジムの願望や人間味に触れ「ロマン主義」との接点を探る。

第6章では、ジムが逃亡に至る経緯を説明し、ジャクソン島でのハックとの再会とその後の生活の日々を追う。ジムがサバイバル技術、知識、知恵を生かして、ハックと共に自然の中で生活を共にする様子を描いている。また自然の中ではハックとジムは対等な関係であることにも言及している。また、誰にも邪魔されない空間を共有する二人について着目し、ハックの自然観がジムの自然観に影響を受けている可能性を指摘している。

第7章では、ジムがジャクソン島にいたことが知られて、二人が再び逃亡する場面から始まる。ミシシッピ川の存在が強調され、自然人としての二人の逃亡生活が描かれる。彼らは法の支配が及ばぬ生活を満喫する。一時的に二人は自由と平和な空間を分かち合う。

第8章では、ジムの思いやりと親切心といった彼の人柄について考察する。ハックが嘘をついてジムをだました時のジムのコメントでハックは良心の呵責に苛まれ、これからは二度とジムをだまさないと決意する。ジムはそういった意味でハックの人生の教師であることに触れる。また、トムの傷を治療した医師がジムの忠義と親切心を高く評価する場面も紹介する。

第9章は、結論でジムの「自然人」としての在り方をさらに吟味し、「自然人」と多くの共通点を持つ「アメリカのアダム」の概観を述べ、自然人としてだけではないジムの「アメリカのアダム」の可能性についてまとめている。